

予察灯

家庭園芸での農薬の適正使用

井上 信彦 (いのうえ のぶひこ)

公益財団法人日本生産性本部がまとめた「レジャー白書 2015」によると 2014 年の余暇活動の参加人口のうち「園芸、庭いじり」は 3,000 万人で 15 位にランクされている。参考までに代表的なものでは 1 位「国内観光旅行」の 5,400 万人、3 位「読書」の 4,990 万人、14 位「宝くじ」の 3,340 万人、19 位「音楽会、コンサート」で 2,560 万人等があげられる。この調査は毎年発表されていて世相を映し出しているとの評価があり、「園芸、庭いじり」のランクは近年、家庭菜園などのブームに押され安定した地位を保っている。

「園芸、庭いじり」には盆栽、庭木の手入れ等も含まれるが圧倒的に多いのは家庭菜園、市民農園等のレンタルファーム、草花栽培である。ベランダでのプランター、鉢物栽培、ガーデニング、野菜作りは趣味と実益を兼ねた格好の余暇活動であろう。余暇というより毎日が日曜日の定年退職者にとっては生活の一部になっているかもしれない。今まで土いじりはしたことはないが、自分で作った野菜を収穫できる喜びを味わうために、実益を兼ねて園芸、野菜栽培愛好家になっている人も多い。

空農地を利用した市民農園は借りるのには抽選があり、キャンセル待ちの場合もあると聞いている。この趣味の園芸愛好家の最大の悩みは病害虫の発生であり、その防除方法にある。スーパーマーケットの野菜は信用ならないからと無農薬栽培に走る人、どこで仕入れてきた情報かわからないが有機栽培などと称して例えばアブラムシには牛乳を散布する人、途中であきらめてしまう人、様々である。園芸店、生活百貨のホームセンターには家庭園芸者向けの用品とともに多くの種類の農薬が陳列されており、これらを利用して病害虫防除ができる。吟味して使う人もいれば、商品の使用目的がわからないまま使う人もいる。「農薬」と聞いただけで危険なものと敬遠する人がいるのは過去の事故、事件等からやむを得ないことであろう。

さて、問題は商品知識がないままに農薬を使う人とわかりやすい表示ができていない商品にある。日用品を購入したら、取り扱い説明書は使用前に一応は読むだろうし、病院、薬局で処方された医薬品は指示通りに服用するものである。

ところが家庭園芸用のラベルは一般園芸愛好家にもな

かなか読まれない。その理由はいくつかあるものと考えられる。農業には素人だから病害虫や農薬の知識は極めて乏しい。虫にかじられているようだ、葉っぱの色がわるいとの診断はできるがそれが何なのか、どのような薬剤が適しているのかまではわからない。商品に大きく書かれたキャッチコピーが頼りである。ラベルをよく読んで適正に使うにしても専門農家向けにできている記載内容を理解できる人は少ない。いや、農家でも理解できない人もいるだろう。

例えば使用時期では「は種時」とあるが、これは「播種時」であって種子を播くときである。「はたね」と読んで「はてな？」と首をかしげても洒落にならない。当用漢字ではないから一部ひらがなになっているが、同じ商品の適用表では「播溝土壌混和」の用語が出てくるのは解せない。使用回数では「3 回以内」とあるが、いつからいつまでの期間なのかすぐには判断できない。病害虫の発生初期なんてわかるはずがない。農家は毎年のパターンを頭に入れておいて気象条件などから判断するし、日ごろの観察も怠らないのである。1,000 倍、2,000 倍希釈も規模の小さい 2～3 株のキャベツに散布するには面倒なことである。すでに希釈されて噴霧装置に充てんしてあるスプレー剤が価格の割にもてはやされている理由はここにあるが、これ一本あれば何にでも効くというオールマイティーではない。知り合いの奥さまから「料理では 3 杯酢なんて表現があるのだから、農薬でも応用したら？」との注文があったが素人の面白い発想かもしれない。除草剤の適用作物の「樹木類」と「樹木等」の違いは農家でもわかりにくいものであろう。

まだまだラベル記載内容については、「ラベルをよく読んで適正に使いましょ」という呼びかけを真に実のあるものにするには、多くの改善点があると考えられる。消費者、行政、商品の生産販売者それぞれの立場での努力と工夫が必要である。

一般園芸愛好家には病害虫・雑草防除のこんなに便利なグッズ（農薬）を正確に理解して、適正に使っていただきたいものである。そのためには行政ではわかりやすい表現、例えば前述の「は種時」は「種子まき時」のような表現や間違いようのない用語の使用、商品生産販売者のわかりやすいラベル記載が望まれる。